

「森銑三刈谷の会」だより 42(2025/5/17)

発行 2025/5/17 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

42:2025/4/19(土)「森銑三(1895-1985)と柴田宵曲(1897-1966)——「柴田宵曲翁日録抄」(『日本古書通信』)を中心に」参加10人 神谷 磨利子

森銑三・柴田宵曲・池田孝次郎の共著『日本人の笑』『瑠璃の壺』についてはこれまでに「森銑三刈谷の会」でも取り上げた。雑誌などに掲載の宵曲をしのぶ文章で『森銑三著作集』正続編に所収のものは15作に及ぶ。

「宵曲子の訪問を受けると、三時間でも、四時間でも話し続けて、倦むところを知らなかった」(「超然たる読書人」1973)と銑三は回想している。宵曲も「夕近く少しくよみ合せ。停電の町を歩みて森氏を訪へばここも停電なり。燭を置きて話し燭尽きて猶話す」(「柴田宵曲翁日録抄」1947/10/9)と書いている。『日本古書通信』1981/7-1991/12 掲載の「柴田宵曲翁日録抄」全112回分を通読すると銑三・宵曲の親交が浮かび上がってくる。銑三の弘文荘勤務についても、1947/9/28に「森銑三氏来。来月より弘文荘の書物を取り扱ふことになりしよし」と書かれている。鶴沼の反町別荘への転居については1950/8/30に「近く鶴沼に移らるべきよし」、9/10「五時頃出でて散歩、森氏の許に到る。今期(今朝)引越されしよし。寂寥の感ひし、\と起る」とある。あれほど互いに行き来し時を忘れ閑談していたのであるから、宵曲の心中を思うと胸が塞がる。

当日の席上、宵曲がよく歩くことに感嘆の声が上がったが、宵曲の世話で政教社の『日本及日本人』の校正をしていた森三郎によれば「柴田氏は昔の東京人なので歩くことには慣れていられる。それに歩かないと胃の調子の悪くなる人であつた」(「犬とどくだみ」上、1967/1)という。1950年、銑三が木村新に依頼してまとめた宵曲の伝記『根岸人』は、初め雑誌『ももんが』に連載されたが、後、銑三は冊子の形で刊行することとし、三郎が刈谷で印刷・校正の任にあたった。

1939/12/3 銑三の先妻文子が亡くなり、告別式後、銑三宅を訪ねた宵曲は「一切のもの旧にかはらず。本箱の上の写真と線香と新に愁いを誘ふ」と書いていた。遺骨は郷里の父が7日に刈谷に運んだことを知る。その父が翌1940/9/22に亡くなったことも宵曲の日録抄で日付を知ることができた。

宵曲もまた、1951/11 妻に先立たれ「名状すべからざ

る感」と嘆じ、その年大みそかには「除夜の鐘ききてのち子然(けつぜん)灯下に座し寂寥の感に堪へず」と吐露している。宵曲の気持を察するかのよう、銑三は篤子夫人手作りのお節を届けている。

宵曲は森家の人々にとってかけがえのない人であった。「日録抄」は森家の歴史を補填する資料にもなった。

当日、木村新『根岸人』を元に書かれた鶴ヶ谷真一「読書人柴田宵曲」(『月光に書を読む』、2008年、平凡社)を紹介した。

柴田(1999)『新編俳諧博物誌』と「柴田宵曲日録抄」

鈴木 哲

柴田宵曲を知ったのは「新美南吉『たんぽぽ句』の真実」新美南吉記念館『研究紀要』14(2008)調査時である。柴田(1999)『新編俳諧博物誌』岩波文庫(初出柴田(1951/4)「蒲公英」『日本及日本人』)に「たんぽぽや幾日踏まれてけふの花 鵬卯」(1724)を見つけた。「柴田宵曲日録抄」は森銑三とクロスオーバーする。森は1939/12 細君[文子, 32歳]を亡くし、翌年5月遺稿集『ゆずり葉』を出す。同年9月に父君[五市, 66歳]を亡くし、10月新夫人[滝村篤子]と再婚する。当時、本郷で母やすと第三郎で同居していた。1945年2月にはやす(73歳)を失い、翌月には本郷居所を焼失する。日録抄で波乱万丈が浮かび上がる。

宵曲翁日録の几帳面な書き方に感心

神谷 明子

宵曲翁日録の人名の多さと時系列を追った記録と動き。これはいつ書かれるのかな?この几帳面さに感心します。私は1日の動きを朝書き出します。それで1日の動きにモレは無い、確認ですね。その中でのすき間時間をうまく使うようにしています。

宵曲さんはじめ、皆さん読書家ですね。やはり知識の素は読書。だから、本の整理は大切。この大切な本が戦争で焼けてしまったことは残念。どう表現したらいいかわかりませんが、平和でありたいです。

宵曲さんは正岡子規のことを子規居士と呼ばれていたようで、嬉しいことです。子規居士の業績などを思えばのことでしょうが、俳句を嗜む者としては嬉しいです。

「読書人柴田宵曲」を読んで

河橋 育実

第42回「森銑三と柴田宵曲」の会の後で、紹介された『月光に書を読む』の中の「読書人柴田宵曲」を読みました。読み終わったら、神谷さんがポロッと言われた「宵曲さんの話をしたら一回では足りない」というのが良く分かりました。

宵曲さんの妹さんの話として幼少期は身体が弱く過保護に育ったので、ああいう人になったんじゃないかと思うとありました。妹さんの言われるああいう人が私には分かりませんが、本を読んで宵曲さんは趣味人という感想を持ちました。

三田村鳶魚翁や寒川鼠骨翁等と協力して「正岡子規」関係でかなり尽力されました。私の中では正岡子規は明治の人で遠い感覚ですが、昭和41年にお亡くなりになられた宵曲さんは子規の住んでいた子規庵で子規の母八重と妹律に会い言葉を交わしていたと思うと一気に身近に感じるのも不思議です。

面白いと思ったのは、宵曲さんは俳句脳で、銑三さんは和歌脳だとありました。銑三さんは宵曲さんに俳句を教えてもらっていたが、銑三さんの俳句は何年たっても上手くならないと言われていたようです。

宵曲さんの書棚には日本文学・童話や子どもの本・さまざまな翻訳本の他英語・仏語の原書があり、まさに「読書家」であり「読書人」だと思いました。

宵曲さんが支那(ママ)の話にも精通していて、銑三さんと協力して支那の話で子どもが喜びそうな子どもの読み物を選んで一冊にした「瑠璃の壺」は教師もされた銑三さんらしい考えだと思いました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第42回 森銑三と柴田宵曲に寄せて

飯田 芳子

最近読んだ本の中に『歩くという哲学』フレデリック・グロ著がある。2008年フランスでベストセラーになったというこの書の中で著者は「自分に出会いなおすとか本当の自分だの失われたアンディンティティーだのを取り戻すとか、そういった話ではないのだ。歩くことによって人はむしろ、アンディンティティーという概念そのものから抜け出すことができる」という。宵曲という人物に心を揺さぶられる。三十歳にして銑三と相知り生涯の友となるとある。此の略年譜(註)がいい。この人と一緒に歩いてみたいと思う。この人はまた銑三を自己のルートの中に自然な形で取り込んでしまったかのよう自然な形でふるまう。この拘りの無さは余人の真似できぬところである。似ているといえば子規であろうか。幸いにして資料は用意されている。一つ一つ取り出してこの人物を探求してみたくなった。

(註)『柴田宵曲文集』全8巻発行の際に出た小沢書店月報『Poetica』1992.7-8所収の略年譜のこと

2025/5以降の予定

43：2025/5/17(土)2階展示コーナー：村瀬典章氏解説「森銑三生誕130年没後40年展」

44：2025/6/21(土)第1会議室：長嶋秀雄「服部長七と三河人」

45：2025/7/19(土)第1会議室：神谷磨利子「森銑三・森三郎往復書簡(昭和43年10月)」を読む

※ 8月は休会

46：2025/9/20(土)第1会議室：鈴木哲「永井荷風「断腸亭日乗」で読む森銑三「偏奇館の或日」」

47：2025/10/18(土)第1会議室：森銑三(1934年)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子銭独楽』(寛政5年、出版つたや)を読む～

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆